

『和漢朗詠集』「款冬」部の意義

藏 中 さやか

Summary

Significance of “Kanto” part in *Wakan Rouei Shu*

Sayaka Kuranaka

Wakan Rouei Shu, compiled by Kinto Fujiwara, is an anthology of carefully-selected precious poetry in the mid-Heian era. The anthology consists of parts representing four seasons and miscellaneous topics, while each part is composed of *Tekiku*, which has adopted the most beautiful part of Chinese and Japanese-Chinese poetry, and *Waka*, which is a thirty-one-syllable Japanese poem.

Each part of the four-seasons is composed of items indicating the progress of season and materials which symbolize the season. The “Kanto” part was selected to portray materials representative of the end of spring. This particular part is remarkable in a way that it does not contain any single Chinese poem. Moreover, “Kanto” in Japanese literature has been mainly understood to represent Japanese yellow rose, while in Chinese literature it represents butterfly.

This paper will first examine the ambiguity of the word “Kanto,” investigate the reason why the part is titled “Kanto,” instead of “Japanese Yellow Rose,” and then discuss the interpretation of the Chinese phrases included in the part and finally the influence of the title of the “Kanto,” derived from the first Chinese poem of the part, for the posterity.

はじめに

藤原公任撰『和漢朗詠集』は平安中期に成立した詞華集である。中国漢詩、日本漢詩からの摘句と和歌を各部立ごとに配したもので、その部立は四季と雑からなる。四季部内の部立は季節の運行を示す事項と、その季を象徴する素材とから構成され、そのひとつひとつの選択は当時の人々の共通認識とも捉えられようが、一面、公任の季節に対する考え方や素材観、ひいては公任なりの「漢」と「和」の捉え方の相違を語るものとも言えよう。

さて、本稿でとりあげる「款冬」部は春部の最末に位置するが、日本漢詩と和歌だけから成り、「子の日」、「女郎花」、「萩」、「前栽」各部等と同じく『和漢朗詠集』の定型からはずれる構成となっている。その本文を岩波日本古典文学大系本により掲げると次の通りで、堀部正二氏・片桐洋一氏編『校異和漢朗詠集』（大学堂書店 昭和五六年）に拠れば、注記を付す伝本があるものの、諸本すべて部立名を「山吹」ではなく「款冬」とする。

款冬

140 雌黄を點著して天に意あり

款冬誤つて暮春の風に綻ぶ

點著雌黄天有意

款冬誤綻暮春風

141 書窓に巻有りて相收拾す

詔紙に文無くしてはまだ奉行せず

保胤

書窓有巻收拾

詔紙無文未奉行

保胤

142 かはづなくかみなび川にかけ見えていまや散るらんやまぶきの花

厚見女皇

143 わがやどの八重山吹はひとへだに散りのこらなん春のかたみに

兼盛

近時、田中幹子氏は『和漢朗詠集』春部に連続する「藤」、「躑躅」、「款冬」各部の巻頭詩句に注目し、それらが紫、紅、黄色という当時最先端の晩春の色彩美をいち早く撰り入れたものであることを指摘された¹⁾が、稿者は本稿において「款冬」部独自の問題点について明らかにしていきたい。尚、本稿では略字「款」は用いず統一して「款」を使用することとする。

一

小学館新編日本古典文学全集本の「款冬」部頭注には次のように記されている。

やまぶき。「かんとつ」「かんどつ」とも訓む。底本「款冬」(「款」は「款」の俗字)に作る。『色葉字類抄』に「款冬 クハントウ ヤマブキ 黄花八重」。中国では厳冬に氷をたたいて(「款」はたたく意)出てくる露のことであるがわが国では石露²⁾や山吹に誤用された。

右の記述にあるように「款冬」は同じ用字ながら和と漢では別種の植物を指す。さらに先学のご指摘にある通り、我が国でヤマブキといった場

合、①初夏に黄色い花をつけるテイトウ（山吹）、②早春に黄白色、紫色で開花するフキ、③十月から十二月に開花するツワブキの三種があり、②がツワブキという異名をもつこともあって、問題は一層煩雑である。結論的には岡不崩の「中古以来、款冬花の和名は、ヤマフキといへるも詩歌には棟棠花を詠み、葉としては、款冬花を用ふる事とせるが如し」という指摘が正鵠を得たものであるが、『和漢朗詠集』独自の問題³に入る前に、「和」と「漢」の問題を含めながら、史料を示しつつなるだけ簡潔に確認しておきたい。

中国における「款冬」は②を限定して指す。『藝文類聚』「款冬」項は『本草経』『爾雅』『范子』『呉子』『述征記』からの用例を示したあと、晋の傅咸の「款冬花賦」と次の郭璞の「款冬賛」を載せる。

吹萬不同陽煦陰蒸款冬之生擢穎堅氷物體所安焉知渙凝

この『藝文類聚』の記載は影響が大きく、我が国の諸書も多くこれを引用する。

『楚辞』九懷「陶壅」には「款冬而生兮 彫彼葉柯」とみえ、『楚辞補注』では各句に「物叩盛陰不滋育也補曰款叩也」、「傷害根茎枝卷曲也」と注する。⁴

『三体詩』張籍の「逢賈島」の用例は次の通りである。

僧房逢著款冬花 僧房に逢著す 款冬花

出寺吟行日已斜 寺を出でて吟行すれば 日 已に斜めなり

十二街中春雪遍 十二街中 春雪遍し

馬蹄今去入 誰家 馬蹄 今去つて 誰が家にか入らん

この用例も春まだ浅い時期の「款冬花」を詠んだもの、つまり漢の「款

冬」が落であることの証として、採り上げられることが多い。

一方、薔薇科に属する①は「棟棠」という。『詩経』小雅の「常棣篇」に歌われる、棠棣とも作る常棣は、にわうめという別の植物である。「花信風」啓蟄の二候を「棟棠」とする⁵ように、暮春の花として知られた。

しかし「棟棠」は『佩文韻府』には立項されていない。現代の『中文大辞典』や『漢語大詞典』では「棟棠」を立項し、宋、孟元老撰の『東京夢華録』七、駕回儀衛の

是月、季春、萬花爛熳、牡丹芍薬棟棠木香、種種上市、：

を用例として示すが、「棟棠」という語の用例が宋代よりどれほど廻りうる語なのであるか、不明である。

文学の上では、漢の「款冬」は我が国のフキであり、我が国のヤマブキに相当するものは漢では「棟棠」と呼ばれたが、この「棟棠」は用例が少なく、時代も廻ることが難しい。

また後述するように我が国の『下学集』が「日本所謂山吹是也」として「酴醾」という異名を伝えている。これを題材にする漢詩文は『佩文齋詠物詩選』卷三三四十六に「酴醾花類」として二九篇が収められているが、いずれも宋金元明時代のもので唐代の作はみられない。『佩文齋廣群芳譜』では「棟棠」と「酴醾」は別々に扱われ、先の「花信風」でも穀雨の二候に「酴醾」をあてている⁶ことから、中国側では「酴醾」は「棟棠」とは別の植物と認識していたものと考えられる。

我が国の貝原益軒も『花譜』「酴醾花」項で次のように述べる。

：花はしろき千葉にして、しやうびに似たり。又菊牡丹にも似たる

故、西国にては、菊いばらといひ、関東にてはばたん花といふ。三

月にひらく。又花のうすあかきあり。尤よし。花はまれなり。…春の終にさく花なる故、王莽猗が詩に、開^テ至^ニ「醜醜」花事了^ルるといへり。其ほか古人の詩多し。詩人の賞翫する所なり。もろこしには、黄色なるもあるよし、格物論にかけり。農政全書にも、又一種黄花ありといへり。篤信今案に、にこり酒の黄色なるを醜醜^{トヒク}といふも、此花の色に似たればいへるなり。

また林道春は『新刊多識編』「款冬」項に

：又一種花似醜醜者亦曰也末布岐 是同和名而異物也 非以似醜醜者為款冬也

と記述する。明らかに益軒と道春はヤマブキは「醜醜」に似た花であるが、「棟葉」と「醜醜」は別種ととらえており、漢籍に見える「醜醜」を我が国のヤマブキとしたのは『下学集』の解釈といえよう。この他、『大漢和辞典』でも「醜醜」に対して蔓生の灌木で初夏に白くて青みのある色の花が咲くという理解を示し我が国のヤマブキとは異なるものと考えており、白井光太郎『樹木和名考』「ヤマブキ」項にも「醜醜ハゴヤラギなり」とある。

一方、我が国ではヤマブキはどのように捉えられていたのであろうか。

『万葉集』では十市皇女の

158 山振之 立儀足 山清水 酌尔雖行 道之白鳴

に見えるように多くは「山振」という形で表記された。その全用例は

山振 8、山吹 4 (含、地名 1)、夜麻夫伎 3、夜麻夫枳 1、夜麻扶枳 1、夜萬夫吉 1、也麻夫支 1

で、上代においては、ヤマブキとフキとの混同は見られない。

しかし、中古になると様相は変容する。

『倭名類聚抄』巻第十「款冬」項に

本草云款冬一名虎鬚、一本冬作東夜末布、岐云夜末布岐 万葉集云山吹花

とあり、それを『箋注倭名類聚抄』は次のように訂する。

：也末布布岐、今俗所云都和布岐是也、…遂誤以款冬為山吹也、…訓同而假借耳、雖款冬山振其訓同、然其語原不同、混為一者誤、

また室町時代の代表的な分類体の辞書である『下学集』(巻下草木門第十四)は次のようにいう。

款冬 日本所謂山吹是也 暮春有^ハ花 日本俗呼^テ款冬^ヲ謂^フ山吹^ト者誤也

款冬 枳莖菜也、所詮日本之俗皆以^テ山吹^ヲ謂^フ款冬^ト、山吹即醜醜也、其色黄而如^シ緑酒^ノ也、

これは日本の「山吹」が「醜醜」であって「款冬」ではないことを言うものである。しかしこの見解に疑義があることは前述の通りである。

一方、本草類は「款冬」について次のように記す。

『輔仁本草』(918年成立)第九卷 草中卅九種

：一名虎鬚。…一名於屈。出^ル藥性。一名耐冬。出^ル藥名。一名苦荬。一名款凍。已上出^ル藥雅。和名也末布々岐。一名於保波。

『康頼本草』(984年ごろ成立)本草艸部中品之下集

味辛甘温无毒。和也末不支。十一月採花陰干。根紫色。莖青紫。

葉似草薺。花黄色如菊花。⁽¹⁴⁾

このように我が国において本草類では「款冬」を中国と同じくフキと理解しながらも、それ以外では「款冬」はヤマブキのことを指すものとなっていた。

貝原益軒が「からにては、さばかりの愛翫なし。わがやまとにては、めでもてあそぶ事甚し」⁽¹⁵⁾と記したように、ヤマブキ、すなわち「棣棠」を題材とした中国漢詩は管見に入らない。平安中期と言う時代にあつて、和漢に通じた公任が何故「山吹」とせず、「款冬」という表記をもつてヤマブキの部を立項したのか。次節ではこの点から考えてみたい。

二

『和漢朗詠集』の全体の部立構成が先行する『千載佳句』や『古今和歌六帖』によっていることは既に指摘の通りである。⁽¹⁶⁾しかし、『和漢朗詠集』「款冬」部には中国漢詩が不載であるという事実が示すように、『千載佳句』には「款冬」部も「棣棠」部もない。また「一」で示したように『藝文類聚』には「款冬」という項目が存在はするのだが、薬草部に含まれており、公任がこれによって「款冬」部を立てたとは考え難い。

一方、『古今和歌六帖』には第六「草」の中に、「山ぶき」が含まれ、その歌数は二一首を数え、歌材としてのヤマブキは先述の『万葉集』以降勅撰集において春のものとして定着している。『古今集』「春下」巻末の主題構成は藤二首、山吹五首、逝く春六首、暮春三首であり、『拾

遺集』「春」では落花二一首、山吹五首、逝く春五首、閏三月尽一首となつている。『古今集』が躑躅を欠き、『拾遺集』が更に藤をも欠いていることに比してみれば、ヤマブキは暮春の花の景としては欠くべからざるものであったと言えよう。また『源氏物語』胡蝶巻では、六条院春御殿の庭園のヤマブキや黄金の瓶に生けられたヤマブキが描かれる。ヤマブキは同物語では女性の形容にも用いられ、装束の色としてばかりでなく、平安貴族の生活に身近にある実景としての花であつたと考えられる。

このようにヤマブキの花は暮春の景物として認識されていたのだが、「款冬」という表記は和歌の世界ではどの辺りから確認できるのだろうか。一つの目安にしかならないが、『和漢朗詠集』に先行する歌合について、現行の本文で確認だけはしておきたい。

既に三木雅博氏が、天曆、天徳両歌合の歌題に「款冬」が存在することを示しておられるが、これらを含め、私見では『和漢朗詠集』成立以前に開催された次の歌合のなかに用例がある。これらの場合、歌題は「款冬」であつても和歌本文は「山吹」となっている。以下、歌合の名称や本文はすべて『平安朝歌合大成（新訂増補）』に拠る。

一 五字多院物名歌合（十卷本）歌題「款冬花」（廿卷本「山吹の花」）
四五天曆十年（二月廿九日）麗景殿女御莊子女王歌合（十卷本、廿卷本）歌題「款冬」

七五天延三年三月十日一条中納言為光歌合（十卷本断簡、廿卷本）
歌題「款冬」

八八寛和二年六月十日内裏歌合（十卷本、廿卷本）歌題「款冬」

なかでも後に歌合の典型と言われた晴儀の歌合である五五天徳四年三月三十日内裏歌合では、双方の表記が混在して使われ、真名文に「山吹」が用いられ、歌題を書出す場合にも「山吹」とあるように、真名と仮名、実景と歌題に特に明確な使い分けの区分が見られないことに、稿者は注目したい。十巻本に拠って示すと次の通りである。

〔御記〕：右方右近中将博雅朝臣、進就洲浜下、読洲浜其和歌。左作金山吹花枝其葉書。右小書色紙。

〔殿上日記〕：洲浜之様大体同右。：其中銀鶴含款冬一枝、以黄金作八重葩以青銀作数片葉、每葉各書一首。

〔仮名日記〕 〈歌題書出し〉 桜三 山吹一 藤一

〈当日の記〉：北には右山吹の花植ゑさせ給へり。：山吹の花の枝の一尺ばかりある金して造れるを執りて、捧げてあたり。

〈歌合本文〉 款冬 左 順

15 春霞井手の河波たちかへり見てこそゆか
め山吹の花

右 兼盛

16 一重つつ八重山吹はひらけなむほど経て
匂ふ花とたのみむ

廿巻本ではさらに「標題」に「款冬」、「仮名日記」に「：歌は洲浜に黄金の花白銀の葉したる山吹の葉に書きたり」とある。

〔款冬〕表記以外でヤマブキを歌題とする歌合は天徳四年内裏歌合の

他に三六（延長八年以前）春近江御息所周子歌合（廿巻本）に「山吹の花」という例がある。しかし、歌合の歌題という範疇においては、『和漢朗詠集』以前に既に「款冬」という書き表し方が用いられており、公任も決して特異な選択をした訳ではないことがわかる。

和歌史の流れからすれば、春の素材を、藤、躑躅、ヤマブキと選び取ったこと自体は自然なことで、この部の選定自体は和に重きを置いたものである。ここで選ばれた二首の和歌はまさに暮春に花開き散っていく「春のかたみ」の花としてヤマブキを歌い上げたものであり、蛙の鳴く水辺に生え（142）、あるいはまた八重咲きである（143）ヤマブキは、オソドックスな姿である。素材として和歌側に比重がある以上、撰歌は容易なことであり、むしろ漢詩句の方にこそ問題が含まれていると考えべきであろう。

「一」で述べたように、我が国のヤマブキに相当する漢名は「棣棠」でありこれを部立名とするためには「棣棠」を詠む漢詩の用例が求められるわけであるが、実際に「棣棠」という語でその様を詠む漢詩は漢和ともに非常に少ないようだ。日本の場合、公任時代以前に成立した漢詩集の索引類をみる限りではその用例は見当たらないのである。一二〇〇年代後半に成立した『書陵部本和漢兼作集』のヤマブキを主題とする部分が和歌のみから構成され「兼作」となっていないという事実がこのことを端的に示している。ヤマブキを詠む漢詩は後述するように『和漢朗詠集』所収の一篇と『新撰朗詠集』所収の一篇、計二篇（保胤作）があるが、この他、平安中期までの作としては大江千里の作という真名序一篇と、大江以言の次の詩句があげられるのみである。

以言の作は『続撰和漢朗詠集』（嘉永五年刊）巻上春款冬142・143に収められ、後続する『続新撰朗詠集』（文久元年刊）は後半二句を、『和漢新朗詠集』（文久二年刊）は前半二句を、それぞれ「款冬」部に採る。『日本詩記』にも載らない典拠不明の以言の作が江戸末期に突然現れた理由は判然としない。¹⁹

暮春の花の景を題材とする日本漢詩は、「百花」「百薬」「雑薬」という語で咲き乱れる花を形容し、桃、李、杏、棠李という植物名は示しても、黄色の花をあらわす特定の固有名詞を表現しない。『新撰万葉集』26では「五彩」という語で春の咲き乱れる花の色を形容する。「黄薬」という語があるが、文室如正の「对菊待重陽」（『類題古詩』120）や、菅原庶幾の「戴酒訪幽人」（『同』145）にあるように、菊のことを指している。「棟棠」すなわちヤマブキを題材にする漢詩そのものがほとんど見当たらないのである。

選者の立場にたってみると、日本的用法により歌合題として用いられる場合のあった「款冬」を部立名に掲げたものの、漢詩ではヤマブキを単独で詩材とすることが少なく、実際に漢詩句を求めると対象となる作品は限定されていたことが予想される。

三

そこで本節では公任によって選ばれた二篇の漢詩句に注目してみた

い。代表的な現代の『和漢朗詠集』の注釈書から第一漢詩句の句意を抜き出すと次の通りである。

・款冬は本来冬の花であるのに、まちがって春の末に山吹として咲いているから、天はこころあつて、そのまちがいを雌黄をもって点々と訂正しようとしているらしい。（岩波日本古典文学大系）

・款冬は名前からいえば冬の花であるのに、誤って暮春に咲いているから、天も情があつて、その間違いを正すために雌黄を点々とつけたのだろう。（新潮日本古典集成）

・春の野に、誤字を訂正する雌黄が点々とつけられているのは、天が考えあつてやったことです。款冬という名をもつ山吹の花は冬に咲くのがふさわしいのに、まちがってこの晩春に咲いている、それを訂正するためなのです。（講談社学術文庫）

・款冬は顔料の雌黄を点々とつけたように咲いている。それは天の情けによるものだ。なぜなら、款冬は本来は冬のものなのに、間違つて春の終りに山吹として咲いているので、その誤りを正そうとして雌黄のような花をつけている。（小学館新編日本古典文学全集）

冬の名をもつヤマブキが春に花開いた景を、訂正のための黄色顔料が「天意」によって点々とつけられていることに見立てた句で、文字遣いに重点を置いた理知的な句と解せよう。

ここでさらに「款冬」が本来はフキのことを指すと知って読解すれば、「款冬」即ちフキの花が暮春の景に一度浮かび上がり、それが点々と黄色に塗られていく、映像的なイメージまでも湧き上がる。款冬と暮春が交響し、二重写しの重層的なイメージが喚起される。それは中国的理解

である「款冬」は「フキ」が、日本的理解である「款冬」は「山吹」に転換されていく様、そのものではあるまいか。「天意」は「款冬」を「山吹」と認めている、そう高らかに宣言するのがこの漢詩句ではなからうか。その意味でこの詩句が一番目に位置するの必然性があると考えてみたい。色彩という観点からの第一漢詩句の重要性については既に田中幹子氏により指摘されたところであるが、稿者はさらに「款冬」部第一漢詩句は、内容自体が日本における「款冬」のあり方を暗示的に示すものであった点を付け加えたいのである。

この漢詩句には『江談抄』第四(六七)に載る中書王(兼明親王)大納言時代(967-971)のエピソードが付随して流布していたものと考えられる。大隅守清原為信が故親父典薬頭真人の語ったものとして伝えられる同話は、春、黄花の盛んな様をみた中書王が作者を誉める様子でこの漢詩句を吟詠したことを述べた後、次のように続ける。

ここに父真人縦谷しんやうとして言はく、「款冬は和名山わなみやまふぶき、本草に見ゆ。その花は冬に開く。今、款冬をもつて山吹の名と為すは誤りなり」と。ここに⁽²¹⁾において、中書大王感悟かんごして云はく、「若、学者に詩を言ふべからず」と。

典薬頭であつた為信の故親父が本草に通じていたが故に、我が国における「款冬」の誤用を指摘し得たというわけだが、中書王の発言からは当時の「学者」はこの事実を理解していたことが予測され、またこのエピソードが漢詩句とセットで流布することで、「款冬」の誤用は公任はじめ平安中期の人々の知るところとなつていったと推測される。このような受容を背景として考えると、誤用を日本の理解として認めていこうと

する公任の意図的な撰句姿勢は、一層、明確になつてこよう。

続く第二漢詩句はどのような内容であろうか。保胤作のこの漢詩句について『私注』『永濟注』等は「題黄花」と注す。『永濟注』の「又、本朝佳句詩云、還テ奇草キソウ裏ウラ何ニ已マ今、更始花中未知名 黄花保胤(22)」という一節から、『本朝佳句』詩には「黄花」という保胤の作が収められていたことがわかる。小学館新編日本古典文学全集本は、

書齋の窓辺に山吹の咲いているさまは、ちよと黄巻を開いたように見えるので、つい巻き収めねばと思つてしまふ。その山吹は詔紙にも似ているけれども、文字が書かれていないので、それを戴いて施行するわけにもいかない。

と解釈し、「窓辺の山吹から黄巻を連想した背景」として『白氏文集』卷五二「朝課」詩(2293)の存在を指摘する。「亭中」の「素琴黄巻」を詠む同詩は藤原明衡「秋夜閑談キヤク」(「本朝無題詩」293)では明らかにふまえられているが、該句の場合はいかがであらうか。

第一漢詩句では一つ一つの点であつたヤマブキの花はここでは書窓に広がる書巻として捉えられる。空間を紙面と見立てる手法は第一漢詩句と共通するが、同時期のヤマブキを詠む和歌にはみられないものである。この詩句はまさに満開の景を詠んだものであるが、句意を理解するために重要なものは「黄花」という、詩題の注記である。保胤が「未知名」ものとして「黄花」を理解しその固有の名称を記し得なかつたのは、「款冬」の誤用を知るが故であらう。そう考えるとここにも「款冬」の日本的解釈の影響が窺える。保胤の詩句が二番目に配置された理由は、配列内の時間的推移を遵守するという点、またやや抽象的な表現でその名を

はつきりと示さないという点からであろう。

ところで「黄花」という場合、『礼記』月令に「季秋之月（中略）菊有黄花」とあるように多くの用例は秋の菊を指し、初冬の水に映ずる黄花を詠む匡房の「初冬書懷」（『本朝無題詩』317）も菊と考えられる。その他、女郎花を指す『新撰朗詠集』265の橘在列の句「一叢百朵入秋登黄色花中無比方」のような例や、「花黄雨後滿庭槐」と槐の花を詠む（『本朝無題詩』364「水閣逐涼」輔仁親王）例外的な場合があるが、通常は菊を指すものと解せよう。そして黄色い花と詔紙という取合せ、連想は島田忠臣の黄菊を詠ずる漢詩（『田氏家集』23「和野内史題局前黄菊之什」）に既に見えている。該当部分を抜き出すと左の通りである。

黄花何處壓宮籬

黄花くわんくわ 何れの処いづか宮籬きやうりを圧する

左掖門前史局垂

左掖門前さやくまへ 史局しきうの垂たるとり

絹著人深分寸剪絹著人深分寸剪

絹は人に著つきて深し 分寸ぶん剪きる絹を黄紙に著すは、替裏衣を着る

紙書詔外数枝披紙書詔外数枝披

紙は詔を書く外ほか 数枝すうし披ひく詔を黄紙に著すは、内史の職なり

（下略）⁽²⁴⁾

以上、二篇の漢詩句は数少ないヤマブキを題材とする漢詩から摘句されたものであるが、稿者は特にその第一漢詩句の表現内容に注目したい。公任は「款冬」の理解が漢と和で異なっていることを承知の上で、敢えてその誤用を修辭のなかに含みこむ句を選んでいると言えよう。日本の暮春に不可欠の花はヤマブキすなわち「款冬」であり、それは漢詩世界のフキとは異なることを明確に位置付け、認めたのである。そしてこの発想は数少ないヤマブキ漢詩の中に存在した第一漢詩句を採用しようとしたところに生まれるものであろう。

（はじめに第一漢詩句ありき）、第一漢詩句の存在が、歌合歌題の伝統に加えて、この部立名の用字の選択に関わっているのではあるまいか。誤用を理知的に捉えた句とそれにつわる中書王のエピソードとが知識人の間には浸透していたことがその背景に存在しよう。

「中国漢詩はもちろん、日本漢詩中にも、「山吹」という用例がなく漸く巡り合った漢詩句が「款冬」という語を含むものであったから「款冬」という用字になった」というような消極的な理由ではなく、誤用を承知でヤマブキという部立名には「款冬」という文字をあて、我が国の「款冬」を高らかに告示しようとした意図的な試みを稿者は読み取りたいのである。

四

さて本節では「和漢朗詠集」「款冬」部が後代にどれほどの影響を与えたのか、という視点から論を進めてみたい。

まず「和漢朗詠集」第一漢詩そのものの理解としては

…款冬誤統暮春風ト云ル詩、若ヒカコトナラマシカハ、公任卿、此集ニ被人哉。又、順和名、僻事ニナリヌヘシ、仍、猶誤ト不可云歟。⁽²⁵⁾

（『和漢朗詠集永洛注』）

に代表されるような、公任という人物に信頼を置こうとする立場がある。この部分は『塵添堪囊鈔』にも影響を与えていて、同書では「款冬ヲ。山吹ト云ハ。誤リト云ハ如何。」に対して、説明を加えた後、

・順力既二本草ノ款冬ヲ引テ。万葉ノ山吹ニ釈シ合セタリ。定テ由

待ルラン。然ニ款冬誤テ綻ニ暮春風ト云ハ。清慎公ノ佳句也。此句若シ誤ナラハ。豈公任ノ卿ノ此詩ヲ朗詠集ニ入給ハンヤ。此ノ三人ノ才者ニ。如ク人有難シ。然者今於ニ本朝ニ。不可難事歟。⁽²⁶⁾と結んでいる。

しかし大勢は江戸期以来、

…萬葉集多借「用字」不少後人不辨之公任朗詠載「款冬」是已誤矣況其餘歌乎。⁽²⁷⁾ (林道春『新刊多識編』)

或人の曰、前問に依て山吹の事をおもひ出たり。朗詠集、款冬を山吹と誤リ訓ずる事久し。⁽²⁸⁾ (『温故叢書 牛馬問』卷之二)

古ヨリ款冬ヲ名花ノヤマブキトスルハ其誤リ朗詠集ヨリ出ツヤマブキハ棟棠繼ナリ款冬ハ元来フキノ事ニシテ山生ノモノヲ山フキト云、ヤマブキト仮名同キ故ニ混ズルナリ。⁽²⁹⁾ (『本草綱目啓蒙』卷之一二)

…要するに、中古我国にて款冬は、公任の朗詠集又は、文人等に誤認されたるも、薬用としての款冬は、本草に云へる、嚴冬に氷下に生ずる、款冬花にして⁽³⁰⁾ (岡不崩『古典草木雑考』)

…順和名款冬をヤマブキと訓し、朗詠集にも款冬をヤマブキとす皆あやまれり、⁽³¹⁾ (白井光太郎『樹木和名考』)

のように、恰も公任が誤りを犯しているかのように表現されてきた。しかし、稿者は「三」で述べたように、誤りを知りつつもおこなったものと解すべきであると考ええる。

既に謡曲『雲雀山』『松山鏡』『款冬(醜醜)』への受容は指摘される⁽³²⁾ところであるが、歌人たちはこの詩句をどう利用したのであろうか。ヤ

マブキを詠む和歌はたくさんあるが、『朗詠集』所収漢詩句の影響は思いの他に少ない。直接的に句意を踏まえたものとしては左の俊成と龜山院の和歌しか見当たらない。⁽³³⁾

・日吉社百首和歌(俊成五社百首の内)

春廿首 款冬

419 山ぶきのなをば冬とぞ聞きしかど春のゆふへの風にこそさけ(夫

木和歌抄) 2030

・嘉元百首

春廿首 款冬

19 款冬のたがあやまちに咲きそめて冬をばよその色となしけん(夫

木和歌抄) 2031

いずれも『夫木和歌抄』にも採られているが、揃って、第一漢詩の詩句を翻案したかのような詠みぶりで百首歌という定数歌詠である。実はヤマブキを「款冬」とすることは百首歌をはじめとする定数歌の歌題のなかに定着しているのである。

そもそも百首歌の歌題そのものが『和漢朗詠集』を規範にしつつ設定されたものであることは明らかにされている⁽³⁴⁾ところで、暮春の代表的景物としてヤマブキも「款冬」という用字をもって撰取されている。私的な場、公的な場を問わず、堀河百首「款冬」、為忠初度百首「滝下款冬」、

崇徳院句題百首「款冬漸散」、宝治百首「籬款冬」、以下、弘長百首、嘉元百首、為家五社百首、土御門院百首等々のように、歌題を明示するスタイルの百首には、「藤」と並んでほとんどの場合に「款冬」は含まれる。用字上の例外は寂蓮結題百首の「山ぶきさきにそふ」である。さら

に次の為尹千首のような千首題に至っては、種々のヤマブキの姿を次のように設定し、ヤマブキの詠じられるパターンを網羅している感さえある。

款冬露 夕款冬 路款冬 池款冬 河款冬 鳥款冬 岸款冬 里款冬
庭款冬 籬款冬

いずれも定数歌の組題の伝統が継承されてきたわけであるが、その嚆矢が『和漢朗詠集』の用いた「款冬」をそのまま撰り入れた堀河百首であることを明確にしておきたい。

そして一般の歌会等における結び題ももっぱら「款冬」という用字をもつてその題とする。³⁵ 具体的には次の如くで、例外は、やまふきの散りのこれを(康資王母54)・ところどころのやまふき(右京大夫40)・水辺のやまふきを、同じ心をよめる(俊頼169・170)・田のいゑの山ふき(堀河11)・拾遺寄山吹(西行1169)である。

款冬繞池(重家329)・款冬蔵橋(顕季324・俊頼171)・款冬傍岸(慈円816)・雨洗款冬(覚性134)・河款冬(家隆1404・定家2019)・河辺款冬(雅兼14)・橋辺款冬(定家1519)・近砌款冬(慈円331)・近対款冬(覚性133)・故郷款冬(定家2193)・行路款冬(重家208)・水辺款冬(金葉7778)・千載114 115・続詞86・惟方40・頭綱88・袋草紙60・112)・折款冬(家隆1013)・暮春款冬(家隆1844)・よる款冬おもふ(惟方41)・隣家款冬(頼政104)

歌合では一三四(永承三年)春鷹司殿倫子百和香歌合(廿卷本断簡、伝定家筆本)、一八七治暦三年三月二五日備中守定綱歌合(類従本)、二一九寛治五年一〇月一三日従二位親子草子合(廿卷本)が歌題を「款冬」、

和歌本文を「山吹」とし、一六一(天喜四年閏三月)六条齋院裸子内親王歌合(廿卷本)は歌題、和歌本文は「山吹」で中間目録、卷八目録は「款冬」、二四七長治元年五月廿日散位広綱後番歌合(宮内庁書陵部本)は歌題「水辺款冬」、和歌本文は「山吹」とする。例外は一二九長久二年四月七日権大納言師房歌合(廿卷本断簡)、一四五永承六年春内裏歌合(廿卷本断簡)で歌題、和歌本文ともに「山吹」または仮名である。

また『和漢朗詠集』の部立に影響をうけて構成されたと考えられる源光行作の句題和歌集『蒙求和歌』には片仮名本、平仮名本いずれにも春部に「劉寵一銭 款冬」として黄金色に想を得てヤマブキを詠む歌を配する。

以上のように、同じ春部の「躑躅」という部立が、ツツジの漢名である(紅)躑躅、杜鵑花、山石榴、山榴の中から第一漢詩に「紅躑躅」を据えることよって選択されたものであったように、「款冬」もやはり第一漢詩由来の部立名であり、両者はともに、以後の歌題の世界に継承されていくこととなったのである。

日本独自の解釈を得たヤマブキを指す「款冬」は漢的な世界にも浸透していく。

例えば順徳院百首の

18 河の瀬に秋をやのこす紅葉はのうすき色なる山ぶきの花

に対する定家の漢文体の判詞には

紅葉薄色古来款冬又残置候、不可思儀候

とあり、延文元(1356)年に尊円親王によって判された守遍自撰の詩歌合には次のようにある。

六番 款冬 左持
12点来露作練細字 開去春看黃菊花

右

13いくほどと思はでみばやくれてゆくはるのなごりの山ぶきの花

憶秋新菊未来色 送節晚花将去粧

詠者守遍も判者尊円もそろって「款冬」に対して、「菊」をイメージしている。尚、12の第一詩句は「二」に掲げた以言作の転句と同一である。守遍が以言の句を利用したと考えるべきか。後考を俟つ。

またかなり時代は下るが、『萃白集』の次の用例

1826堪賞款冬妖艶春 尤如重釀酒中新 従今欲記醱醱字 落後枕幃猶

可人

のように漢詩の中で「款冬」は用いられるのである。

おわりに

これまで『和漢朗詠集』春部の中の「款冬」という部立をとりあげて考察を試みた。「款冬」という表記と「山吹」という表記との間の明確な使い分け意識というものはいかなるものであったのか。テキストが書写されていく過程で用字の変更がなされたことも考慮に入れなければならないので、その実情の正確な把握は不可能である。しかし、定数歌の世界には「款冬」でもって定着し、歌題としては「山吹」ではなく「款冬」で表記することのほうが圧倒的に多い。その根底にあるのは『和漢朗詠集』春部の中の「款冬」という部立の存在であり、そしてそれは同

集の撰者、公任が選びとった一篇の漢詩句に由来しているものなのではなかったか。

注

(1) 『和漢朗詠集』躑躅部成立の背景―王朝の色彩美―(鈴木淳氏・柏木由夫氏編『和歌 解釈のパラダイム』笠間書院 平成九年)。尚、「躑躅」部の設定に問題があることは三木雅博氏『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社 平成九年) I、二においても指摘がある。

(2) 現代のものとして、①岡不崩氏『古典草木雑考』(大岡山書店 昭和一〇年、第一書房 昭和五一年復刻)、②齋藤正二氏『植物と日本文化』(八坂書房 昭和五四年)、③吉田多津雄氏『款冬・山吹考』『無名抄』―井手の款冬・蛙の事―にひかれて(『駒澤国文』第一四号)、④『古典植物誌』④山吹と山露(『中世の文学』附録8 三弥井書店 昭和五五年)等がある。いずれも本稿にも引用した類書、古辞書類の記載に基づいているが、後述するように誤用の指摘の歴史は『江談抄』の時代にまで遡り、特に江戸期に複数の学者によって問題にされている(『古事類苑』植物部、『廣文庫』参照)。

(3) 前掲注(2)、①同書。

(4) 『楚辞索引・楚辞補注』(中文出版社 1972年)。

(5) 『中国文学歳時記』(同朋舎出版 昭和六三年) 春上、「花信風」項、参照。

(6) 前掲注(5)に同じ。

(7) 『益軒全集』(国書刊行会 昭和四八年) 卷之一より引用。

(8) 本文の引用は前掲注(2)、①同書に拠る。尚、『多識編』については、川瀬一馬氏『多識編について』(『続日本書誌学之研究』雄松堂書店 昭和五五年)に詳しい。

(9) 内田老鶴圃 昭和八年。

(10) 東京大学国語研究室資料叢書一三巻『倭名類聚抄京本 世俗字類抄二巻

- 本」(汲古書院 昭和六〇年)に拠る。
- (11) 明治一六年版本(卷十草木部草類)に拠る。
- (12) 古辞書叢刊元和三年版本に拠る。
- (13) 『統群書類従』雑部四三輯、卷八九二所収本に拠る。
- (14) 『統群書類従』雑部四三輯、卷八九三所収本に拠る。
- (15) 前掲注(7)同書、「棧棠花」項。
- (16) 前掲注(1)、三木氏同書。本稿の三木氏の説はすべて同書に拠る。
- (17) 柳澤良一氏「新撰朗詠集」注解稿(十二)(金沢大学紀要 第五号)に詳細な解説がある。
- (18) 拙著『題詠に関する本文の研究 大江千里集・和歌一字抄』(おうふう 平成一二年)第一章付節参照。尚、同節でとり上げた「具坂」の「馬」の用例は、大江匡衡「秋日東閣林亭即事、應教」(『日本詩紀』卷之三十三)にも認められることを追記する。
- (19) 柳澤良一氏「統撰和漢朗詠集」について「近世の朗詠集の一典型」(『和漢比較文学』第二号)、後藤昭雄氏編『日本詩紀拾遺』(吉川弘文館 平成一二年)参照。
- (20) 本間洋一氏編『類題古詩本文と索引』(新典社 平成七年)に拠る。
- (21) 本文は岩波新日本古典文学大系本に拠る。
- (22) 伊藤正義氏・黒田彰氏編『和漢朗詠古注集成』第三卷(大学堂書店 平成元年)所収本に拠る。
- (23) 以下の『本朝無題詩』中の用例については本間洋一氏注釈『本朝無題詩全注釈二』(新典社 平成五年)参照。
- (24) 小島憲之氏監修『田氏家集注 卷之上』(和泉書院 平成三年)参照。
- (25) 前掲注(22)同書。
- (26) 『塵添瑣囊鈔』(『大日本佛教全書』第九三卷纂集部二)卷第九(十六)款冬ノ事 付春女華事 除障事 順和名鈔説事。
- (27) 前掲注(8)に同じ。
- (28) 『日本随筆大成』(第三期)一〇(吉川弘文館 昭和五二年)に拠る。
- (29) 杉本つとむ氏編『小野蘭山本草綱目啓蒙―本文・研究・索引―』(早稲田大

学出版部 昭和四九年)に拠る。

- (30) 前掲注(2)①同書。
- (31) 前掲注(9)同書。
- (32) 芹川軀生氏、飯塚恵理人氏『謡曲の和漢朗詠集受容』(有精堂 平成五年)。
- (33) 本学の村上直之教授のご教示に拠る。
- (34) 松野陽一氏「鳥帯 千載集時代和歌の研究」(風間書房 平成七年)「I 組題定数歌考」等。また『後拾遺集』における『和漢朗詠集』の影響は、川村晃生氏「和歌と漢詩文―後拾遺時代の諸相―」(和漢比較文学叢書『中 古文学と漢文学I』汲古書院 昭和六一年)に詳しい。
- (35) 瞿麦会編『平安和歌歌題索引』に拠る。但し、「近砌款冬」題の茲円歌は歌番号に誤りがあつたため私に訂正した。

(付記) 本稿は甲南女子大学『和漢朗詠集』研究会(代表、片山享先生)例会(平成九年九月六日)における口頭発表に基づく。席上、貴重なご意見を下さった片山先生と田中幹子氏はじめ会友諸氏に深謝する。また内容の一部は本学専門部会(平成一一年一月二〇日)でも発表させていただき、多方面からのご指摘を得た。記して学恩に感謝する。

(原稿受理二〇〇〇年四月一四日)